連載16

「癒しの時代」の青木ヨット・スクール

愛知学院大学教授
守誠

確か1997年のことだった。日本を代表するヨットパースンがレース中に四国沖の海に落ちて死んだ。アサヒビールのスーパードライのコマーシャルにもよく登場した難波誠さんであった。

「なぜ?」

「ライフジャケットをつけていなかったからです」

青木ヨット㈱の社長、青木洋さんは、きっぱりと言い放った。

難波さんを責めているのではない。日本のヨット界のあり方に、問題が潜んでいるのではないか。ヨットがレース中心に考えられ、のんびりと安全なクルージング（巡航）を楽しむヨット遊びを、隅に追いやってきたからであろう。レースは時として、安全性を無視する。

「ほら、これ見てください」

ヨット関係の雑誌『KAZI』のページを広げながら、青木さんが指さしたのは、レーシング・ヨット（競走用ヨット）に乗った人たちであった。何枚もの写真に登場するヨットパースン誰一人、ライフジャケットをつけていない。

2年前から、「青木ヨット・スクール（ヨット教室）」をはじめたそうだ。

「すぐ海に出て、ヨットの操作を教えるわけではありません」

「と、言いますと?」

「これまでのヨットスクールの授業では、すぐヨットの走らせ方に入ってしまいます。レースを中心に考えたスポーツ・ヨットの弊害でしょう。安全なヨットを楽しむ。海を楽しむ。自然を楽しむ。そんな部分が欠落しているのです」

イラスト／こ山　まき子

「で青木ヨット・スクールでは何を第一にやるのですか」

「まず〝安全〟について教えます。安全を守るのは精神論ではなく、《正しい知識》と《最新の安全装備》です」

「具体的に言いますと?」

「ライフジャケットと命綱の正しい使い方です」

彼の話によると、「悪いライフジャケット」や「悪い命綱」は、かえって命を落とす。例えば、ライフジャケットだが、日本の船検制度の規定に従うと、浮力は7・5キログラムとなっている。いまだにこの規定に基づいて作られたライフジャケットが売られている。危険千万だ。

「波がない静かな海なら、浮力が7・5キロでも体は浮きます。でも嵐の時、大波にのまれると、とても浮くどころではありません。国際的には、浮力は30ポンド（約14キログラム）、日本の倍の水準が求められています。これなら嵐の時も大丈夫です」

セーリング（帆走）の技術よりも、安全性を第一にした青木ヨット・スクールの人気は上々で、2日間コースは今年いっぱい、満員だそうだ。

「どんなライフジャケットを選ぶか、どんな命綱を選ぶか、それはあくまで受講者の自己責任です。こちらは、選ぶための基準を教えるだけです」

海に放り出された時、意識不明でも顔が仰向きになれるように出来た自動膨張式の輸入品が売られている。

青木ヨット・スクールの2日間での受講料は4万円で、全国から受講生は集まる。40歳代の終わりから60歳代が中心だ。5人に1人は、中古ヨットを買って行くそうだ。青木ヨット製の新製品「信天翁24」は、発売後半年間で11隻売れた。そのうち4隻は卒業生が買った。

「なぜ、新製品がそんなに売れるのですか?」

「中高年向けに特別に設計された世界で初めてのヨットだからでしょう」

そう言いながら、青木さん

もり　まこと　1933年横浜生まれ。慶応大学経済学部卒。総合商社に32年間、勤務。退職後、大阪国際女子大学コミュニケーション学科教授から愛知学院大学経営学部教授に。著書は、『華麗なる窓際族』『特許の文明史』、50万部を超す大ベストセラーになった『英会話・やっぱり・単語』など20冊あまり。

ビジネスパースン心得帳

気分は右肩上がり

ちょっと

は、新しいヨットの特徴を説明してくれた。

(1) 1人で動かせる。
(2) すべらない。
(3) 力がいらない。
(4) 寿命が2倍長い。

青木ヨット・スクールで4日間のコースを受講し、信天翁24で操縦法を教わった家電メーカーの管理職が、いみじくも言った。

「これで明日から、会社に行ける」

彼は、リストラをやらなければならない立場にある人だそうだ（やってほしくないが）。日常が苦しい。もちろん毎日出勤し、つらい仕事はこなしているのだが、海と風のセーリングの中で、心は甦ったのであろう。ヨットはいまや「癒しの時代」のシンボルになった。

青木さんはかつて、世紀の冒険家だった。無線機も方向探知機もエンジンもない、星と羅針盤をたよりにした「原始航法」で、世界一周したヨットパースンだった。数百隻の大型小型の帆船をのみ込んだ南米大陸の南端、「魔のホーン岬」を、全長わずか6・4メートルの超小型の手作りヨットで挑戦した者は、世界で誰一人いなかった。失敗率90%、すなわち死亡率90%を意味した。残された10%の確率で彼は生還した。1971年に大阪を出て、74年までの2年6カ月の大冒険は終わった。彼が乗った手作りヨット「信天翁2世号」は大阪万国博跡地に展示されている。

ライフジャケットの大切さを強く訴える青木さんだが、25年前の大航海の時は、持っていったが一回も使っていない。

彼にその大切さを教えてくれたのは、アメリカ・セーリング協会（ASA）で「インストラクター」の資格を取った時だった。信じられないほどむずかしい試験を、日本人としてただ一人合格したとき〝青木洋は変身した？〟。

この「不況期の雇用不安」と「長い老後の時間の過ごし方」に悩む多くの人々に、青木ヨット・スクールは海のメッセージを送り続けている。

●青木ヨットの連絡先は、大阪府泉南郡田尻町りんくうポート北1番地 ☎0724-65-8192